

平成22年度職員研修
研修のまとめ



鹿児島市立宮小学校

目次

I. 研究の概要

- ①研究テーマについて
- ②めざす子ども像
- ③研究の視点について
- ④研究組織について
- ⑤年間計画

II. 研究の実際

- ① 2年生国語科
「サンゴの海の生きものたち」
- ② 5年生社会科
「自動車を作る工業」

III. 研究の成果と課題



I 研究の概要

①研究テーマについて

〈宮小学校 研究テーマ〉

自分の思いや考えを生き生きと伝え合う子どもを育てる学習指導法の研究

～コミュニケーション能力を高める活動を通して～

(1 / 3年次)

1 テーマ設定の理由

(1) これまでの研究と子どもの課題

昨年度までの3年間算数科の研究を通して、子どもたち一人一人の特性を把握し、子どもたちの実態に応じた授業を行ってきた。特別支援とも連携し、支援が必要な児童にはTTによる指導や個別指導など様々な授業形態の工夫や数概念を形成するための教具作りなど、子どもたちが「わかる」喜びを実感できる授業研究を行ってきた。

しかし、自分の考えを授業の中で出し合い、話し合いを通して意見をまとめていく「学び合い」活動がなかなかうまくいかず、意見がまとまらなかったり、自分たちで解決ができなかったりする姿が見られた。原因として、子どもたちが何を基準にして話し合えばよいか話し合いの視点が不明瞭だったことと、一人一人が自分の課題として捉え、考えることができなかつたために話し合えなかつたことが考えられる。

そこで、一人一人が自分の考えを持ち、そして、発表することができる子どもの育成を今後の研究課題とすることにした。

(2) 社会の要請

中央教育審議会答申では、「生きる力」を育むための重要な要素の一つとしてコミュニケーションの必要性を説いている。

〈子どもたちの現状〉

「自分や他者の感情や思いを表現したり、受け止めたりする語彙や表現力が乏しいことが、他者とのコミュニケーションがとれず、他者との関係において容易に感情的な言動(いわゆるキレル状態)にはしる一因となっており、これらについて指導の充実が必要である。」

〈コミュニケーションの必要性〉

「自分に自信がもてず、自らの将来や人間関係に不安を抱えているといった子どもたちの現状を踏まえると、コミュニケーションや感性・情緒、知的活動の基盤である国語をはじ

めとした言語の能力の重視や体験活動の充実を図ることにより、子どもたちに、他者、社会、自然・環境とのかかわりの中で、これらと共に生きる自分への自信をもたせる必要があることである。」

(3) 新学習指導要領改訂の趣旨

新学習指導要領総則の「教育に関する改善事項」

- ① 言語活動の充実
- ② 理数教育の充実
- ③ 伝統や文化に関する教育の充実
- ④ 道徳教育の充実
- ⑤ 体験活動の充実
- ⑥ 外国語活動の充実

言語活動とは・・・言葉を通して的確に理解し、論理的に表現する能力、互いの立場や考えを尊重して言葉で伝え合う技能を育成するための活動。実生活の様々な場面における活動例が2学年ごとにまとめられている。

(4) 本校の実態

- ・ 児童数64人、各学級20人以下の少人数学級の学校である。
- ・ 特認生制度により、他の校区から通学する児童もいる。
- ・ 地域支援ボランティア校に指定されており、地域の方々の支援をもらい交流する機会が多い。

(5) 児童の実態

- ・ 素直に人の話を聞くことができる。
- ・ 自分から積極的に話しかけることができる。
- ・ 児童一人一人がみんなの前で発表する機会が多い。
- ・ 異学年同士の交流が見られる。
- ・ 限られた人数のため、多様な意見が出にくい。

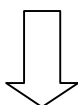
(6) 児童の言語の現状

- ・ 言葉遣いが悪い。(例:「きもい」「うざい」「まじー」など)
- ・ 短縮語(例:「めっちゃ」「すごっ」「はやっ」「むずっ」など)
- ・ らぬき言葉(例:「食べれる」)
- ・ 間違った日本語(例:「すいません」「多良かった」「全然大丈夫」)
- ・ 語彙力不足、意味を知らない

②めざす子ども像

〈宮小学校のめざす子ども像（能力）〉

よい聞き手・よい話し手の育成



コミュニケーション能力が高まる

- ・（相手を意識して分かりやすく）話すことができる子ども
- ・（相手の考えを理解し、自分の考えと比べながら）聞くことができる子ども
- ・（問題を解決するという目的をもち、相互の意見を認め合いながら）
話し合うことができる子ども

〈宮小学校のめざす子ども像（態度）〉

みみをすませて

みんなのほうをみて

やさしいきもちで

はやさにきをつけて

しずかに

しっかりさいごまで

よいしせいで

よくわかるように

うなずきながら

うしろまできこえるように

きく宮の子

はなす宮の子

③研究の視点

視点① 学校教育全体で求められているコミュニケーション能力を明らかにすることで、授業の中での伝え合う活動を工夫することができるのではないか。

☆授業の展開の工夫（各教科で伝え合う活動をどこですか。）

☆各教科の発表の実態分析（話すこと・聞くこと・話し合うこと）

☆学習指導要領の分析（今求められているコミュニケーション能力を分析）

視点② 発表環境づくり

自己肯定感（自信）をもち、互いを認め合える人間関係を築くことができれば、のびのびとコミュニケーションをとることができるのではないか。

☆日常的な人間関係作り（自分のことを伝え、相手のことを知る）

・あいさつ

・仲間づくり活動

☆ほめる・ほめられる活動（自分のよさを知り、他人のよさを認める）

視点③ 言語環境づくり

多くの言葉を知り、意味理解を深めることで、言葉を介した豊かなコミュニケーションをすることができるのではないか。

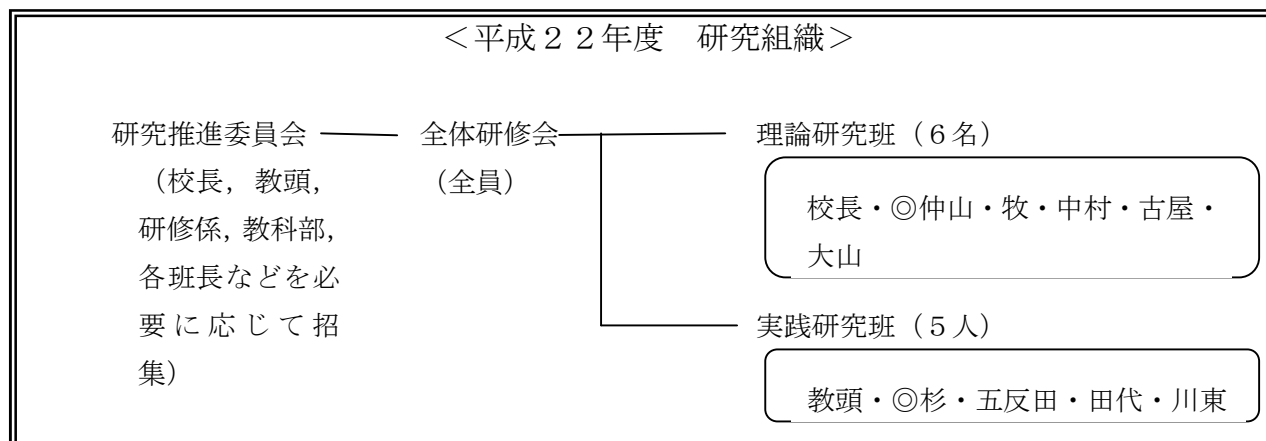
☆読書活動の活性化（言葉を知る）

☆言葉を使う活動

・短作文作り

☆様々な年代の方とのふれあい活動

④研究組織について



⑤年間計画

月日	時	研修内容	担 当
4. 2 6 (月)	2	研修テーマの決定及び仮説の検討。研修計画検討	研修
5. 1 0 (月)	1	テーマ研修・通知表検討	研修・班長
5. 1 2 (水)	1	研究推進委員会①（＊テーマに関する研修）	研修・班長
6. 1 6 (水)	1	テーマ研修・班別研修	研修・班長
6. 2 1 (月)	2	テーマ研修・班別研修	研修
6. 2 3 (水)	1	研究推進委員会②（班活動の報告・今後の計画）	研修
6. 2 8 (月)	2	◇学力検査分析・テーマ研修・班別研修	研修・班長
7. 7 (水)	1	研究推進委員会③（1学期の取り組みの反省と課題）	研修
8. 2 (月)	2	◇新学習指導要領について	各教科主任
9. 1 3 (月)	1	テーマ研修・班別研修・指導案検討（細案①）	研修・班長
9. 2 2 (月)	1	・ 検証授業（略案・音楽）・授業研究 ・指導案検討（細案①）	研修
9. 2 7 (月)	2	・ 検証授業（細案①）・授業研修（第2学年）	研修・学年部
9. 2 9 (水)	1	研究推進委員会④（2学期の課題の検討・研究授業について）	研修
10. 20 (水)	1	案検討（細案②）・検証授業（略案・4年たんぽぽ）・授業研究	研修・学年部
10. 25 (月)	1	指導案検討（細案②）	研修
11. 8 (月)	2	・ 検証授業（細案②）・授業研修（第5学年）	研修・学年部
12. 6 (月)	1	・ 検証授業（略案・6年）・授業研究	研修・学年部
1. 1 7 (月)	1	・ 検証授業（略案・3年）・授業研究	研修・学年部
2. 7 (月)	1	・ 検証授業（略案・1年）・授業研究	研修・学年部
2. 1 6 (水)	1	テーマ研修（本年度の取り組みの成果と課題）	研修・班長
2. 2 1 (月)	2	テーマ研修（来年度の取り組み）	研修
2. 2 3 (水)	1	研究推進委員会⑤（1年間の研修のまとめ、次年度の計画）	研修
3. 7 (月)	1	研修の反省・課題	研修

Ⅱ. 研究の実際 (細案の指導案のみ掲載)

① 2年 国語科「サンゴの海の生きものたち」

第2学年国語科学習指導案

平成22年9月27日(月) 5校時

男子1名 女子6名 計7名

指導者 大山 聖子

- 1 単元名 だいじなところに 気をつけて読もう 「サンゴの海の生きものたち」
- 2 目標 海の生きものたちがどのようにかかわり合っているのかを読み取り、共生の仕組みの不思議に興味をもつ。
- 3 単元の評価規準
 - 海の生き物の共生関係や、説明文の組み立てに興味をもって読もうとしている。
【国語への関心・意欲・態度】…評①
 - 共生する生き物たちの気持ちを想像し発表したり、友だちの発表を集中して聞いたりしている。
【話す・聞く能力】…評②
 - 「サンゴの海の生きものたち」が互いに役立っていることを、事柄の順序を考えながら読んでいく。
【読む能力】…評③
 - 図鑑や本を使って、自分が興味をもった海の生きものの図鑑を作っている。
【書く能力】…評④

4 単元について

本単元は、説明文教材である。児童にとっては、1学期に学習した「たんぼぼのちえ」に続く2度目の説明文の学習となる。「たんぼぼのちえ」では、時を表す言葉(「春になると」「2,3日たつと」など)に着目し、時間的な順序を考えながら、たんぼぼの「様子」と「わけ」からたんぼぼのちえを読み取る学習をしてきた。本単元では、海の生きものの体の仕組みを生かし、お互いにどのように関わり合っているのか「共生関係」を事柄の順序を考えながら読み取っていく。

鹿児島は海に囲まれた土地ではあるが、住んでいる場所が海から離れた場所にあるため、児童にとって海が生活に密接した身近な場所であるとは言えない。海の生きものと接する機会は、水族館に行った時か海に遊びに行った時など年に数回である。そして、本単元で取り上げるのは、いろいろな海の中でも「サンゴの海」となっている。サンゴの海とは、暖かい鹿児島の海のことでもある。サンゴ礁があり、サンゴが生息しているが、自分の目で海にあるサンゴや生き物を見た経験のある児童はいない。「サンゴの海」や「サンゴの海で生きる生き物」たちは、児童にとって遠い世界である。しかし、

自分たちの住む鹿児島海が「サンゴの海」であることを実際の写真や映像、実物を見せることで、本単元への興味・関心を高め、サンゴの海を身近な海に感じられるようにしたい。

本単元では、生き物同士のかかわり合いを読み取ることを目標としている。児童にとって「かかわり合い」という言葉は、聞きなれない意味をつかみにくい言葉であろう。「助け合う」や「守り合う」は行動から言葉の意味を想像しやすい。しかし、「かかわりあう」は、「かかわる」という言葉の意味がイメージしにくいいため、どんな様子を表す言葉なのかを考えにくい。そこで、お互いの生き物の気持ち想像させ、それを生かして、動作化を行う。「かかわり合う」とはこういうことなのだ動きを持って言葉の持つ意味をつかめるようにしたい。海の生き物たちのかかわり合いをきっかけに、海だけでなく陸の生き物や私たち人間でも当てはまるのではないか興味を持つことができれば、この学習をさらに深化できると考える。

5 児童の実態

本学級は、男子1名、女子6名計7人の少人数学級である。少ない人数ではあるが、元気があり、発表することに意欲を持っている。また、大変聞く姿勢がよく、友だちが発表する時には、友だちの方をさっと向いて話を聞くことができる。国語の学習においては、動作化が好きで、「ふきのとう」の時には、自分たちで空いた時間を使って練習をしていた。休み時間には、足繁く図書室に通い、読書にも意欲的である。互いに声をかけ合い、互いに高め合うことができる子どもたちである。生き物にも関心が高く、かたつむりやダンゴ虫など外から生き物を連れてきては、自分たちで飼い方を調べ、世話をする姿が見られた。

しかし、少人数であるため、多様な意見が出にくく、一人の意見に「同じです」と同調して済ませてしまうこともある。また、普段の声は大きいのが、発表する時の声が小さい。そして、早口である。聞き手を意識した声の大きさや話す速さはこれから重点的に指導していかなければならないところである。

(平成22年9月13日 質問紙法 7人)

【国語への興味・関心】

1 国語の中でどんな学習が好きですか？

話す・聞くこと（5名） 読むこと（2名） 書くこと（0名）

2 選んだ中でも特にどんなことが好きですか？訳も教えて下さい。

話す・聞くこと

- みんなの前で発表すること（4名） わけ：話すともみんなが聞いてくれるから
拍手してもらえるから
自分のことを知ってもらえるから
- みんなの話を聞くこと（1名） わけ：いろいろ聞いていると楽しくなるから
人の考えを聞いて、アイデアが生まれるから

読むこと

- ・音読すること（1名）
 - ・読書（1名）
- わけ：みんなが聞いてくれるから
いろいろなことがわかるから
わからないことがわかるから

3 どんな本を読むのが好きですか ・物語（4名） ・図鑑（3名）

（考察）アンケートをとった時に行っていた単元が、話す聞く領域だったこともあるのか話す聞くことに関心が高いのが特徴である。みんなに自分の発表を聞いてほしいという思いが強いことがわかる。読書の傾向で物語に偏るかと思っていたが、図鑑を見るのが好きな児童が以外と多い。生き物の飼育や野菜の栽培、野外での生き物探しの活動などの中で、図鑑を活用する経験があったらからではないかと推察される。写真と実物を見比べて名前探しはできるが、図鑑の内容の読み取りまでは難しいようである。海の生き物図鑑作りの際は、児童でも読みやすい解説の付いた図鑑や本を事前に準備することが必要である。

【本単元に関する実態】

- 1 海に行ったことがありますか ・はい（7名） ・いいえ（0名）
- 2 海でどんなことをしましたか？（複数回答可）
- ・泳ぐ練習（5名） ・魚さがし（3名） ・貝殻拾い（2名）
- 3 海の中にいる生きもの（複数回答可・多い順）

人数	海の生き物の種類
7	イカ
6	タコ・カニ
5	さば・ウミヘビ・カジキ
4	マグロ・ふぐ・たい・さめ
3	さんま・金目鯛・クマノミ
2	イソギンチャク・ひらめ・さけ・ウミガメ・ハリセンボン
1	ウニ・ツブ貝・アジ・サンゴ・やどかり・ほっけ・カレイ

（考察）全員海で過ごした経験があり、海での楽しい思い出を持っていた。毎年のように海で過ごしている児童もいれば、今年初めて海を経験した児童もいた。海は、児童の生活には身近な場所ではないが、海は楽しい・楽しみの場所のようである。海の生き物についても、たくさんの種類の魚を知っていた。食べられる魚を特によく知っており、買い物に行った時や食べた時によく目にする魚たちが児童にとってなじみのある海の生き物のようである。ウミヘビやクマノミなど水族館で見られる生き物を書く児童もいた。児童が理解する海の生き物は、自分の生活の中で知る・見ることができる生き物が多い。サンゴの海の生きものたちに出てくるサンゴやホンソメワケベラなどなじみのない生き物は、映像や写真から情報を与え理解を深められるようにしたい。

【読み取りの実態】

1 「たんぼぼのちえ」を読んで、時を表す言葉、たんぼぼの様子、わけに線を引きましょう

2、3日たつと、その花はしぼんで、だんだんくろっぽい色にかわっていきます。そうして、たんぼ
(正答7名) (正答4名、無回答2名、誤答1名) (正答5名、
ぼの花のじくは、ぐったりとじめんにたおれてしまいます。けれども、たんぼぼは、かれてしまったの
無回答1名、誤答1名) (正答1名、無回答4名、誤答2名)
ではありません。花とじくをしずかに休ませて、たねに、たくさんのえいようをおくっているのです。
(正答7名)

こうして、たんぼぼは、たねをどんどん太らせるのです。
(正答5名、無回答2名)

2 次の言葉の意味を書きましょう。

- ・じく (くき：5名、たんぼぼの長い棒：1名、無回答1名)
- ・すっかり (全部：2名、いつの間にか：2名、しぼむ：1名、全然：1名、無回答1名)
- ・すぼんで (とじる：3名、しぼむ：2名、小さくなる：1名、重くなる：1名)
- ・ちえ (頭を働かせること：2名、生きるためのコツ：1名、はたらくこと：1名、おうち：1名、
ところ：1名、もの：1名)

(考察) 時間の順序を表す言葉の読み取りができていないが、たんぼぼの様子の読み取りが不十分である。

たんぼぼの変化の様子が順を追って書かれているのを最後まで読み取ることができていなかった。また、理由の読み取りも、文の最後の部分「～のです。」に留意して読むと読み取りやすい。しかし、理由のキーワードを考えながらの読み取りができていないことがわかる。読み取る際のキーワードを考える活動を取り入れるべきだった。

語彙の理解に関しても、授業の際に一つ一つ意味を押さえていても、十分な理解まで至っていないことがわかる。言葉の意味を前後の文を読んで考えた児童もいるが、言葉そのものの理解はできていない。語彙の意味理解を深めるための手立てと工夫が必要だと考えられる。

6 指導にあたって

本単元の指導にあたって次の3点に留意して指導していきたい。

まず、1点目は、読み取りである。児童が生き物の様子を読み取り、読み取ったことを発表しながら授業が進められる。教材文のどの部分を読んで分かったことなのか、必ず、教材文に戻り、根拠となる文を全員で確認させる。その際に、たんぼぼのちえでは、指導が不十分だった、文末表現に着目させ「～ます。」と「～のです。」の意味のの違いを再度確認する。

2点目は、語彙の意味理解である。児童がイメージを持ちにくい語彙は、読み取りの際に一つずつ確認をする。動きに関する言葉は、実際に動きながら、物の名前は実物や写真を見せながら、気持ちや感じを表す言葉なら、その場を設定し実際に使って見せながら語彙の意味理解を図りたい。また、学んだ語彙を使って短文作りを行い、互いに発表し合う場を持つことで数多くの例文に触れさせる。学習で学

んだ語彙は、設営の言葉の木にも付け加え、児童がいつでも意味を確かめられるようにする。

3点目は、動作化である。児童が読み取った関わり合いの文章に合わせて、動きを入れることで児童が楽しみながら文章を読み、語彙の意味理解を深められるようにしたい。動作化の際に、それぞれの生き物の気持ちや互いの会話を想像させることで、生き物の行動や体の仕組みには理由があることを理解させる。互いを守り合う、助け合うということが関わり合いなのだとして動作化を通して実感させる。

本校の研究との関わりから、「読むこと」の学習の中でできる伝え合う活動（コミュニケーション能力を高める活動）として、特に動作化に重点を置いて指導していきたい。友だち同士で、生き物の気持ちや会話を考え話し合う、友だちの前で自分の考えを発表する、友だちの発表を聞く、発表を見ての感想を交流し合う、の4つの活動を通して、伝え合うことの喜びと楽しさを感じられるようにする。

7 指導計画（総時数10時間）

過程	時間	主な学習活動	指導上の留意点
課題をつかむ	1	「サンゴの海の生きものたち」を読み、感想を話し合う。 【評①】海の生き物の共生関係や、説明文の組み立てに興味をもって読もうとしている。	<ul style="list-style-type: none"> ・題名からサンゴの海はどんな海か想像させる。鹿児島海もサンゴの海であることを写真で知らせ、海や生き物に興味を持たせる。 ・初めて知ったことと不思議に思ったことに線を引かせ、感想を書く時に線を生かして書かせる。
	2	学習のめあてと計画を立てる。 海の中の生きものたちのかかわり合いを知り、海の生きもの図かんをつくらう。	<ul style="list-style-type: none"> ・説明文がいくつのまとまりにわけられるか、生き物たちの文章を手掛かりに考えさせる。 ・冒頭に2度出てくる「かかわり合い」の言葉に着目させる。ここでは、「かかわり合い」の意味まではおさえない。
教材文を読み	3	イソギンチャク・クマノミは、どんな生き物なのか文章を読み取らせる。 【評③】「サンゴの海の生きものたち」が互いに役立っていることを、事柄の順序を考えながら読んでいる。	<ul style="list-style-type: none"> ・2人組で、生き物の特徴（体の仕組みや色、形）を読み取り、ワークシートに書かせる。 ・「クマノミは〇〇〇生き物です。」と〇に当てはまるように、発表させる。根拠となった文も併せて発表させる。
	4	2つの生きものの役割を決め、気持ちを考え、動作をつけて発表する。【本時】 【評②】共生する生き物たちの気持ちを想像し発表したり、友だちの発表を集中して聞いたりしている。	<ul style="list-style-type: none"> ・教科書の写真から、生き物の気持ちを想像させる。 ・
	5	大きな魚とホンソメワケベラのかかわり合いを読み取る。	<ul style="list-style-type: none"> ・ホンソメワケベラが、どんな姿・形の魚かを確認してから、教科書の2枚

取る		【評③】海の生き物の共生関係や，説明文の組み立てに興味をもって読もうとしている。	<p>の写真を見せ，なぜ，一緒にいるのかを考えさせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・掃除をする＝食べ物をもらう＝助け合いもかかわり合いの一つだということをもとめる。
	6	生き物同士のかかわり合いをまとめる。	<ul style="list-style-type: none"> ・2つ生き物同士の関係を→を使いながら整理させる。 ・矢印がお互いに向き合う(=)ことで「かかわり」ではなく「かかわり合い」であることをつかませる。
表現する	7	<p>海の図鑑の内容を考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生き物の色 ・形 ・体の長さ ・食べ物 ・その生き物しかないこと 	<ul style="list-style-type: none"> ・最後の文を再度読み返し，他の生き物について調べてみたいという意欲を持たせる。 ・どんなことを図鑑に書けば分かりやすいか，今まで読み取った生き物の特徴を思い出させる。
	8	海の生きもの図鑑作りをする。	<ul style="list-style-type: none"> ・児童が読んで分かりやすい本や図鑑を事前に図書室から借りて準備しておく。
	9	海の生きもの図鑑作りをする。	<ul style="list-style-type: none"> ・自分から進んで調べられない児童には，ヒント箱から生き物の写真を取らせて，取った生き物について調べるように働きかける。
	10	<p>自分の作った海の生き物図鑑の発表会をする。</p> <p>【評④】図鑑や本を使って，自分が興味をもった海の生きものの図鑑を作っている。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・友だちの作った図鑑の良さを見つけて発表させる。 ・作った図鑑の生き物の中にもかかわり合っている生き物がいたら紹介させる。 ・他の学年の児童にも見てもらい，自分で続きを作りたいという意欲を持たせる。

8 本時の実際（全10時間の第4時）

（1） 目標

- 2つの生き物のかかわり合いを動きを通して理解することができる。
- かかわり合いの様子を本文から読み取ることができる。
- 友だちと話し合ったことを発表したり、友だちの発表を集中して聞いたりすることができる。

（2） 指導にあたって

「導入」段階では、前時までに読み取った2つの生き物の特徴を読み直し、確かめる。クマノミとイソギンチャクがどんな生き物だったかをつかんだ上で、教科書に載っている写真を見せる。写真に写っているのは、読み取った特徴からクマノミとイソギンチャクであることを確認する。この写真から、本時の学習で姿も形も異なる生き物が海の中ではどうして一緒に生活しているのか、生き物の立場に立って考えさせていくことを理解させる。

「展開」段階では、児童がイソギンチャクとクマノミになって会話を考える。しかし、すぐには、生き物の気持ちに入り込みにくい。前単元の「あったらいいな、こんなもの」の学習を生かし、生き物の気持ちが理解できる道具を準備し、楽しみながら入りこめるようにする。7人いるため、2人組ができないところは、3人組となり、どちらかの生き物の数を増やすようにする。なかなか自分の考えを書けない児童には、クマノミを食べる大きな魚が来た場面とイソギンチャクを食べる小さな魚が来た場面を描いたヒントカードを渡し、その場面で2つの生き物はどんなことを言っていたのかを想像させる。それでも、なかなか、考えられない時には、ヒントカードに描かれたクマノミとイソギンチャクに表情を描かせ、表情から想像できる言葉や気持ちを書かせる。

自分たちの考えた会話を使い、2つの生き物の動きもつけて発表させる。発表の際には、手袋をはめてする。手袋を使うことで、2つの生き物の違いを分かりやすくなり、動作化の時も動きやすくなる。動きながら発表できないグループは、自分たちの考えた会話を発表させる。各グループの発表の前に、聞く時の視点（自分たちと同じ所、違う所、よい所、分かったこと）を与え、友だちの発表を聞き合うことを促す。発表が終わった後、お互いの発表の良さや生き物になってわかったことを発表させる。

最後に、再度、めあてに戻り、一緒にいる理由を2人組で考えさせる。考えを出し合う時に、教材文から根拠になる文章を読ませて、かかわり合いについて書かれた文章が読み取れるようにする。共に生きるのは、互いに利益があるためで、特に、自分の命を守るためにお互いを利用し合う関係にあることを文章からつかめるようにする。

「終末」段階では、本時のまとめをした時に、「守り合い」＝「かかわり合い」であることを伝える。また、「合い」という言葉がつくのは、なぜなのか考えさせ、2つの生き物の関係を矢印を使って整理する。このように、生きるためにかかわり合う関係にある生き物が他にもいるかどうか、予想を立てさせ次時への意欲を持たせる。

(3) 本時の実際

過程	時間	主な学習内容	指導上の留意点
導入	5	1 前時の学習を振り返る。 2 本時の学習問題をつかむ。 イソギンチャクとクマノミは、どうしていっしょにいるのだろう。	<ul style="list-style-type: none"> ・前時で読み取ったクマノミとイソギンチャクの特徴を発表させる。 ・ビデオの映像・写真から、2つの生き物の海の中での様子をつかませる。 ・色も形も違う異種の物同士が共に生きている不思議さを人間と比較することで感じられるようにする。
展開	35	3 2人組で役割を分けて、会話を考える。(10) ・各自のワークシート→発表用ワークシートに書く。 ・変身道具を使って、練習する。 *変身帽子→生き物になって話したり、考えたりすることができる。 *変身手袋→海の生き物になって動くことができる。 4 自分たちの考えた会話や気持ちを発表する。(10) 5 友だちの発表を聞いて感想を交流し合う。(5) 6 一緒にいるのはなぜなのか2人組で考え、自分たちの考えを発表する。(10)	<ul style="list-style-type: none"> ・発表は、生き物変身セットを使って、動作もつけて行うことを伝える。 ・3人組になるところは、どちらかの生き物を2人にして考えさせる。 ・会話を考えつかない児童には、ヒントカードを使って考えさせる。 ・赤手袋はクマノミ、白手袋はイソギンチャクで役割を分ける。 ・考えた会話から生き物の動きを考えさせる。 ・書いたワークシートを黒板に貼ってから発表させる。 ・発表が終わった後に、感想を交流し合うことを伝え、聞くことを促す。 ・動きがでなかったら、考えた会話の発表だけをさせる。 ◎2つの生き物のかかわり合いを動きを通して理解することができたか。【評価①】 ・友だちのよさや動作化を通して分かったことを発表させる。 ◎友だちと話し合ったことを発表したり、友だちの発表を集中して聞いたりすることができたか。【評価③】 ・再度、めあてを読み、何のために一緒にいるのか2人組で話し合わせる。 ・考えたことをワークシートに書かせる。 ・考えた理由も本文から探し、併せて発表させる。 ◎かかわり合いの様子を本文から読み取ることができたか。【評価②】
終末	5	7 学習のまとめ イソギンチャクとクマノミは、たがいをまもりあうためにいっしょにいる。 8 次時の予告	<ul style="list-style-type: none"> ・「守る」ではなく「合う」がつくのはなぜか、読み取った2つの生き物の様子から考えさせる。 ・「守り合う」ことが「かかわり合う」ことの意味の一つであることを押さえる。 ・他にもかかわり合う生き物がいるのか予想させる。

(4) 評価

- 2つの生き物のかかわり合いを動きを通して理解することができたか。
- かかわり合いの様子を本文から読み取ることができたか。
- 友だちと話し合ったことを発表したり、友だちの発表を集中して聞いたりすることができたか。

～授業研究～

(授業者反省)

- ・動作を通してかかわり合いの言葉の意味をつかませたかった。児童は意味をつかめていた。
- ・児童からでた意見を教師がうまくまとめられなかった。
- ・発表の場を多く取り「話す」「聞く」を意識した授業作りを行った。
- ・個別で考える活動が多く、子ども同士の「伝え合う」活動が足りなかった。

(意見)

- ・動作化が楽しかった。
- ・互いの生き物のやりとりのようすを「会話」で表現するのはよかった。
- ・子どもたちから「守り合う」という言葉が出てきてよかった。
- ・ワークシートに子どもたちがたくさん書いていたのでびっくり。楽しく活動していた。

- ・みんなで一斉読みの時間や場がひつようだったのではないか。
- ・ワークシートに書く部分が多く、負担になったのではないか。
- ・教科書に色分けしてあるラインの意味は何か。(それぞれの生き物の様子で色分け・線引き)
- ・ワークシートとヒントカードの違いが分からなかった。
- ・動作化と役割演技との違いがわからなかった。
- ・動作化でねらったのは、「かかわり合うこと」。教師と子どもと1対1の関係になっているが、子ども同士の「かかわり合い」が見られなかった。
- ・教科書が分からない時の拠り所となっていたのか。
- ・2つの生き物が一緒にいる利点を黒板にまとめてもよかったのでは。
- ・動作化をしながら気持ちを考えていくのか。気持ちを確かめるために動作化をするのか。
- ・子どもたちの誉め方が足りなかった。

(指導助言)

<授業内容について>

- ・「かかわり合い」を読み取ることが主眼。子どもたちがほとんど自分なりに解釈できている。授業と子どもの実態が合っていたのか。
- ・動作化の必要性について。動作化をする理由は2つある。①内容の理解、②読み取った内容が正しいかどうかの確認。今日の授業は、①だった。高学年では、動作化ではなく文章から読み取りができる。
- ・説明文を読むよさについて。①論理的思考力を付けるため。②知らなかったことを知ることができる③作者の主張を知ることができる。④問いかけの文章の形態から読み解く楽しさを味わえる。⑤説得の仕方が学べる。
- ・授業の中でどのようにして読みをするか。1回目の読み…導入で本時の学習場面の理解の時。2回目の読み…展開で全員の発表の後。3回目の読み…終末で学習のまとめとして。

<研究テーマについて>

- ・発表はするが、自分たちでまとめることができない。コミュニケーション能力をどの程度まで捉えているかを考えなくてはいけない。
- ・お互いに聞き合いながらよりよいものにもっていかなくてはならない。
- ・授業の中でのコミュニケーションを考える。言語環境を整えるためにも、指示と教師の話し言葉を加えてほしい。

① 5年 社会科「自動車をつくる工業」

第5学年 社会科学習指導案

平成22年11月8日(月)5校時

男子5名 女子10名 計15名

指導者 田代 千尋

1 小単元名 自動車をつくる工業

2 小単元について

(1) 位置とねらい

本小単元「自動車をつくる工業」は、小単元「工業生産と工業地域」「工業と貿易」とともに、大単元「わたしたちの生活と工業生産」を構成している。原材料を加工し、その形や性質を変えたり部品を組み立てたりして生活や産業に役立つ製品を作り出している工業に目を向け、わたしたちの生活を支える工業生産の特色や、工業生産に従事している人々の工夫や努力、工業生産を支える貿易や運輸の働きについて理解することができるようにすることをねらいとしている。

子どもたちはこれまでに、農業や水産業に従事する人々の工夫や努力、効率的な生産を支える人々の協力、消費地までの運輸の働きなどを追究する学習を通して、農業や水産業がわたしたちの食料を確保する重要な役割を果たしていることや自然環境と深いかかわりをもって営まれていることを学習してきた。このような学習を通して、自分たちの生活に深くかかわる他の産業の様子やそれに従事する人々の工夫や努力に関心をもち始めている。

そこで、本小単元「自動車をつくる工業」では、身近にある工業製品として自動車を取り上げ、その生産工程や自動車工業に従事している人々の工夫や努力、自動車生産を支える貿易や運輸の働きを理解するとともに、従事する人々の努力によって産業が発展していることや、産業の発展により国民生活の維持と向上が図られていることを考えることをねらいとしている。また一方で、現在抱える問題点から、これからの自動車生産の課題や工夫、努力について、自分たちの生活に関連づけて、自分なりに考えをもち、深めることができるようにしたい。

このような学習を通して、自動車工業と自分たちの生活とのつながりについて理解していくとともに、自分の考えをもち、表現し、伝え合うことの喜びと楽しさにも気付かせていきたい。

(2) 指導の基本的な立場

現在、ほとんどの家庭が自動車を所有し、毎日必ず目にしている。そして、わたしたちが生活していくうえで欠かすことのできないものとなっている。そのため、児童にとっても身近なものであり、興味・関心を持ちやすい教材であると考え。また、自動車は、様々な工業製品を組み合わせで生産されているので総合工業といわれており、自動車工業の発展は、日本の工業の発展にもつながり、国民生活の向上に大きく関わっているといえる。自動車工業に従事する人は、「かんばん方式」や「ジャスト・イン・タイム方式」、「指示書」などのシステムによって組み立て工場と関連工場を結びつけることを考え出したり、高速道路などの交通の便がよいところ・互いに近い距離に工場を

立地したりするなどして、常に、消費者のニーズに応えたり、生産性を高めたりするために努力や工夫をしながら生産活動に励んでいる。

一方で現在の自動車工業を取り巻く状況について、今日的・世界的課題解決のため環境に配慮した自動車の開発や、安全・福祉に目を向けた開発にも取り組んでいる。また自動車工業は、世界ともつながっている産業であり、貿易摩擦や産業の空洞化など様々な問題も起きている。これらの課題は、仕組みは違うものの、他の産業でも同じようなことがいえる。そのため、既習の農業や水産業の学習を想起させ、関連付けながら、学習を進めたい。

(3) 子どもの実態

本学級の子どもは、比較的穏やかに過ごすことができている。学習に対しても前向きに取り組むことができる子どもが多い。ただ発表に対して、積極的に取り組む子どもが多い反面、自分の考えに自信がもてなかったり、周りの反応を気にしすぎてしまったりして、活発とはいえない場面も見られる。また、子ども相互の学びあいについても、発表したことに対する問いかけや深める発言があまり見られず、相互の意見交換による思考の深まりが求められている。考えに至る過程が疎かになりがちで、自分の考えの過程を振り返ることよりも結果の出すことに偏ってしまう傾向がある。ペアや小グループでの意見交換を継続的に続けるとともに、各種資料から読み取ったことだけでなく、自分なりの考えを持たせ、伝え合う場を設けるとともに、より深い思考に導くために、話合う視点を与えるなどの手立てをとりたい。

次に、自動車工業に関する実態は次の通りである。【調査人数】15名【調査方法】プリントによるアンケート

1	1週間の自動車利用日数
	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1日－0人 ・ 2日－1人 ・ 3日－1人 ・ 4日－3人 ・ 5日－2人 ・ 6日－3人 ・ 7日－5人 *クラス平均－5.3日
2	自動車工業に関わる場所に行った経験
	<ul style="list-style-type: none"> ・ 組み立て工場－0人 ・ 修理工場－13人 ・ 販売店－14人
3	自動車の利点（自由記述・複数回答可）
	<ul style="list-style-type: none"> ・ 長距離の移動－9人 ・ 短時間で移動－7人 ・ 音楽や映像が楽しめる－7人 ・ 快適さ（エアコン・風雨をしのぐ・眠れる・室内が静か）－4人 ・ 手軽に乗れる－3人 ・ かっこいい－3人 ・ 多くの人や荷物が積める－1人 ・ エコになってきている－1人 ・ 安全－1人
4	自動車の問題点（自由記述・複数回答可）
	<ul style="list-style-type: none"> ・ 事故(事件)が多い－12人 ・ 排気ガスで環境が悪くなる－6人 ・ ガソリン代がかかる－3人 ・ 値段が高い－3人 ・ 壊れる－2人 ・ 遠いところには行きにくい－1人 ・ 免許を取らないと乗れない－1人 ・ スピード違反等が多い－1人 ・ エンジン音がうるさい－1人 ・ カーブが曲がりにくい1人 ・ 車内で熱中症になる人がいる－1人
5	乗ってみたい自動車（自由記述・複数回答可）

- ・かっこよさ—11人 ・大人数の乗れる広さ—7人 ・かわいさ—7人
- ・室内の快適さ（テレビ・ナビ・コンセント）—7人 ・速い—5人
- ・事故が起こりにくい—3人 ・電気自動車—3人 ・低燃費—3人
- ・好きな色—2人 ・静かなクルマ—1人 ・ハイブリッドカー—1人
- ・故障しにくい車—1人 ・安い—1人

1週間の利用日数から、自動車は子どもたちにとって、非常に身近な工業製品でありながらも、その製造過程や内部構造を見た経験のある児童はほとんどいない。

自動車の利点や問題点では、利便性や機能性、デザイン(スタイル)に多くの意見が集まっており、環境や安全に視点を置いた回答はあまり見られなかった。自動車選びの基準についても、同じような傾向がみられる。「電気自動車」や「低燃費」「ハイブリッドカー」などニュースや家庭でも話題に上るようなことについて知っている児童もいたが、断片的な知識で、しっかりと理解しているとはいえないと考えられる。

このようなことから、追究する段階で、統計、写真、映像などの資料を活用し、しっかりとした事実認識を図れるようにしていきたい。また、環境や安全に関心をもち始めている児童もいるので、授業を進めていく中で取り上げ、生かしていくようにしたい。

(4) 指導上の留意点

単元の展開に当たっては、まず児童と自動車生産とのかかわりを感じさせる手立てとして、学習問題づくりの場面で、児童の興味・関心を高めるような体験的な活動を行う。具体的な活動として、身近にある工業製品を分解する体験を行う。その活動を通して、機械に対する興味・関心を高めていくと同時に、小さな機械の中にもたくさんの部品があり、それらは複雑に組み立てられていることに気付かせたい。次に実際の自動車に着目させ、普段の生活の中では触れることの少ないエンジンルーム等を実際に見ることにより、自動車は自分たちが分解した機械よりも多くの部品があり、安全性や性能を考えながら複雑に組み立てられていることに気づき、自動車を利用する立場だけでなく、生産する側からも多面的に問題意識を持たせ、その生産工程や自動車工場で働く人々の工夫や努力に対する興味・関心を高めていきたい。このような体験的な活動の中から生まれた一人一人の問題意識や興味・関心を生かしながら、学習問題づくりを行う。

調べる段階については、映像、写真、統計などの資料を活用し、事実に基づいた追究活動を行っていきたい。実際に工場見学等に行くことは難しいが、シートなどの部品の実物や組み立て工場の映像を提示するなどして、より見学に近い体験をさせる工夫も取り入れていきたい。ただ工程をたどって自動車が組み立てられていく様子を追いかけるのではなく、生産性や労働環境、環境に対する配慮など、そこに従事する人たちの工夫や努力についてもしっかりと押さえたい。これからの自動車生産に関する学習では、ニュース等でもふれることの多い環境面をきっかけとして考える。ハイブリットカーや燃料電池車などのエコカーを開発している背景や今後の問題点などにも触れることで、環境面だけでなく安全面や福祉面など、まだまだ解決しなければならないことがあることに気づかせたい。

まとめ・広げる段階では、今まで学習してきたことをもとに、これからの自動車づくりでは、どのようなことに配慮して自動車づくりが行われていけばよいのかについて、自分なりの考えを持ち、理想の自動車を考案する。そして、これからの自動車づくりについての企画会議を行う。

自分たちが将来自動車に乗るであろう約10年後を想定した自動車を考案させ、互いの考えを交流し合うことで、これからのよりよい自動車の在り方について、多面的、総合的に考えられるようにしたい。

本校研修テーマとの関連から、本小単元では特に、視点1「各教科・各単元における伝え合う活動(話す・聞く・話し合う活動)の展開」について、重点的に取り組んでいきたい。お互いの意見を認め合い、相手の意見をもとに、自分の見方や考え方を再構成していくような学習につながるよう、自分の立場を明確にした話し合いの場を設定していきたい。資料提示の際には、視点を与えた資料の読み取りを行い、資料から読み取れたことに対しての自分の意見・立場をもつ場を確保することで、伝え合う活動において、自分の意見をしっかりと伝えることにつながると思う。また、毎時間の終末に学習した事象に対して自分の考えを確認する時間を設け、事実に基づいて思考する経験を重ねていけるようにする。「まとめる・広げる」段階の企画会議においては、自分の意見を、根拠を明確にして発表させることによって、意見を出し合う視点がはっきりしてくると考える互いに意見交換を行うことで、自分の意見を強化・修正・深化させることができるような話し合いを位置付けることにより、社会的事象への見方や考え方を深めていきたい。

3 小単元の目標

- (1) 自動車工業の生産の様子について意欲的に調べ、環境や安全のことを考えたこれからの自動車開発心を持ち、進んで学ぼうとすることができる。 (社会的事象への関心・意欲・態度)
- (2) 自動車の生産について、従事する人々の工夫や努力、関連工場とのつながり、機械化による生産や輸送の工夫などと関連づけて考えるとともに、これからの自動車開発について考えることができる。 (社会的思考・判断)
- (3) 写真やインターネット等の映像資料、従事する人の話(文章資料)等の各種の統計資料を目的に応じて活用し、自動車生産の特色をとらえることができる。 (観察・資料活用の技能・表現)
- (4) 自動車工場の生産の特色と課題、従事する人々の工夫と努力について理解している。 (知識・理解)

4 指導計画（1 1時間）

学習過程	学習内容	教師のはたらきかけ
つかむ・立てる（1）	1 自分たちの生活と自動車・自動車工業とのつながりに気づき、学習問題を設定する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> 自動車づくりの工夫や努力について調べ、これからの自動車について考えよう。 </div> 2 予想し、学習計画を立てる。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 工業製品の分解や自動車のエンジンルーム等を見ることで、その部品の多さや複雑さから組み立てる側の視点を持たせる。 ・ 自動車工業に対する子どもたちの疑問や調べたいことを焦点化し、追究の柱を設定し、学習の見通しをもたせる。
調べる（6）	3 学習計画に沿って、追究活動を行う。 <追究の柱> <ul style="list-style-type: none"> ・ 自動車を組み立てる仕組みや工夫 ・ 部品をつくる仕組みや工夫 ・ 消費者への運ばれ方 ・ 自動車の世界への広がり ・ 環境や安全を考えてつくられた自動車開発など 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 統計、写真、映像など様々な資料を基に、視点を明確にした読み取りを行い、学習問題の解決につなげる。 ・ 資料から読み取れた事実だけでなく、そこからわかることや感じたことを伝え合うことで話し合いに深まりを持たせる。
まとめる・広げる（4）	4 これからの自動車の企画書を作り、提案の準備をする。 5 これからの自動車について企画会議を開き、これからの自動車に必要なものを考える。 <本時> 6 企画会議での話し合いをもとに、これからの自動車づくりについて考え、単元の学習のまとめをする。	<ul style="list-style-type: none"> ・ これからの自動車について個人で作成した企画を、重視した視点によって分類し、グループ編成を行う。グループごとに企画書の作成し、必要な資料を収集する。 ・ 発表する際には、根拠を明らかにして自動車の企画書を発表し、共通点や相違点、関連性を見つけながら話し合わせる。 ・ 学習したことをもとに、これからの自分の生き方を考えさせる。

5 本時（9時間目／11時間中）

（1）目標

今まで学習してきたことをもとにこれからの自動車づくりについて話し合いを行い、環境や安全、福祉などを考えていくことが必要であることに気づくことができる。（社会的な思考・判断）

（2）本時の指導にあたって

つかむ過程においては、前時の学習まで想起し、これからの自動車を自分たちのアイデアで創り出そうという話し合いの目的を再確認し、本時の見通しを持てるようにする。また、話し合いの手順や話し方・聞き方・話し合い方についてのポイントを確認してから話し合いに臨ませたい。

調べる段階では、グループごとに、それぞれの自動車作りの根拠となった考え方（環境・安全・福祉など）についてもう一度確認し、自分たちの着眼点が課題に沿ったものであるかを確認させる。またグループ内での分担（提案係や資料提示係、記録係など）をしておく。話し合いでは、①グループからの提案②質疑応答③話し合いの手順で進める。それぞれの手順の前には、グループごとに話し合う時間をとり、発言を精選させる。話し合いが一方的になったり停滞したりしたときには、重要な発言を取り上げたり、意図的に指名・発表させることで新たな理由や根拠にもふれさせたり、話し合いが活発になるように支援したい。論点がずれてきたときには、それぞれの考えのもとになっている根拠は何か（環境・安全・福祉など）を意識させ、それに沿った発言を心がけさせる。意見の言い合いにならないよう、「賛成で」「反対で」「似ている」「付け加えると」「少しちがって」「〇〇さんの意見を聞いて、□□と思った」などといった関連付けた意見の交流を促したい。クラスで1台の自動車の構想を完成させることを目的に話し合いを進めるが、開発の根拠を明確にした発言を行うことで、開発の視点を焦点化していきたい。

まとめの段階では、これからの自動車作りで大切にしていきたい、最終的な自分の考えを、根拠を明確にしてワークシートに書きこむ。自分の考えの深まりに影響を与えた発言を思い出させ、紹介し合うことで、討論することの意義や楽しさ、喜びに気付かせる場にしたい。また様々な意見を出し合い、よりよいものを作りだそうとする話し合いの過程を振り返り、自分の意見を持ち、伝え合うことができたことを称賛し、未来に対しても肯定的・建設的にとらえることの大切さと希望を実感させたい。

(3) 本時の実際

過程	主な学習活動	時間	○指導上の留意点 *評価
つかむ	1 前時までの学習を振り返る。	5	○ 前時までの企画書を振り返り、本時のめあてを確認する。 ○ 話合いの目的や手順、話し方・聞き方・話合い方を確認し、児童の意欲を高める。
	2 本時のめあてを立てる。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 5px auto;">これからの自動車についての企画会議を開こう。</div>		
調べる	3 グループごとに打ち合わせを行い、発表の準備をする。(グループ)	5	○ 前時までに作成した企画書と必要な資料を整理し、発表や討論の最終準備をさせ、根拠を明確にした発言を意識させる。 *グループで根拠を明確にしなが提案を整理する意見を出し合うことができたか [評価①] ○ 各グループで、役割分担を決めておき、意見交換がスムーズにいくように支援する。 ○ 話合い中は、話合いが停滞した時などの方向付けをしたり、重要な発言を取り上げて意識させたりするなど、話合いが活発になるように支援する。 ○ 根拠を明確にした発言を行わせることで、それぞれの考えのもとになっていることは何か(環境・安全・福祉など)を焦点化していく。 *立場とその根拠を明確にしなが発表し、比較しながら聞き、話合うことができたか。 [評価②]
	4 企画会議を開き、これからの自動車について企画会議を行う。(全体) <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 5px auto;">どんな自動車がこれからの自動車にふさわしいのだろうか。</div> <企画会議の手順> ・各グループからの提案 ・質問 ・話合い <話合いの視点> ・根拠となるもの(こと)は何か。 ・何を重視して作られているか。 ・学習してきたことが盛り込まれているか	20	
まとめる	5 話合いを振り返り、これからの自動車づくりへの自分の考えをまとめる。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 5px auto;">これからの自動車は、が大切(必要)である。</div>	13	○ 焦点化された視点の中から、優先する視点とその根拠を明確にした最終的な自分の考えをまとめる。 ○ 話合いの中で、考えが変わった児童やより深まった児童を紹介し、考えの深まりを実感できるようにする。 *話し合いでの意見を参考にしながら、自分の考えをより明確に持つことができたか。 [評価③]
	6 次時の学習を知る。 ・単元のまとめ	2	

(4) 評価

- ・ 今まで学習してきたことをもとにこれからの自動車づくりについて話合いを行い、環境や安全、福祉などを考えていくことが必要であることに気づくことができたか。

～授業研究～

1 授業者反省

- ・ 社会科の授業での話し合い活動ができなかった。根拠を基にした話し合いが難しかった。
- ・ 意思決定の時間がとれなかった。
- ・ 各グループの発表時間が長くなった。練習不足であった。掲示などで他のグループの案を事前に把握しておく必要があった。
- ・ メモを取りながら聞くことができていなかった。

2 意見

- ・ 児童を4グループに分けた意図とは。(→事前の児童の企画書からグループ編成)
- ・ 子どもたちの設計案が多岐にわたっている。教師側から調べ段階での働き掛けはあったのか。(→児童の発想が中心)
- ・ 個別学習からグループ学習になった時どんな話し合いをしたのか。(→一番いい意見から順番に。10年後に実現しそうなものなど話し合いの視点を与えた。)
- ・ 論点がずれた時の対応とは。(→問題意識をもっているの、意見を添えて言えるようになればいい。)
- ・ めあてまでの教師側からの提示や流れがスムーズだった。
- ・ 教師が子どもたちの考えや視点をよく把握し理解していた。
- ・ 子どもたちが豊かな発想を持っていてすばらしかった。
- ・ 子どもたちの話し合いは十分になされていた。どの子にも伝えようと努力する姿が見られた。また、双方向の意見のやりとりがなされていた。
- ・ 児童のプレゼンの後、他の児童からの質問が重複していた。
- ・ 質問→批判と責めるだけで終わらないようにしなければいけない。
- ・ 自分の主張を通す意見⇄人の意見に耳を傾け尊重することが大事。本時は、自分の思いを大切に伝えていた。今後は聞き合うことも必要。
- ・ 時間に余裕があれば、クラスで1台の車を作るなどまとめができた。
- ・ 発表の時に早口の児童がいる。人前で話す時は、ゆっくりと話す練習をする。
- ・ 児童の事前アンケート→乗ってみたい自動車→自分たちで考えた車をまとめることで、児童の変容が知りたかった。

3 指導助言

- ・ 児童が落ち着いていた。子どもたちの意見を全て受け入れていた。
- ・ ICT機器を児童が良く使いこなすことができていた。
- ・ 子どもたちの発想の豊かさがよかった。
- ・ グループ内での発表は、うまく伝えられている。話し合いの中で否定的な意見を肯定的な意見として言えるようになれば、「君だったらどうするか」という切り返しも必要。
- ・ まとめは、それぞれのよさがあり、一つにまとめるのは難しいので、3つの視点をそれぞれ生かしてまとめてよいのではないか。

Ⅲ 研究の成果と課題

1 研究の成果

- ・ 児童が自分の意見をまとめて発表する力がついてきた。
- ・ 学級の子どもが全員、何回も発表できるように意識するようになった。
- ・ 全員が研究授業を1回ずつすることで、いろいろな教科における先生方の技術を見ることができ大変参考になった。
- ・ 授業研究では、いろいろな係を経験することができた。
- ・ 職員のコミュニケーション能力が高まった。

2 研究の課題

- ・ 発表形式など全学級で統一して取り組むことを決める。
- ・ 言語環境の整備を進める。(言葉ボックスやかるたなど)
- ・ 一教科における研究が深められなかった。
- ・ 各教科好きな教科をやっても深まらない。教科として取り組むのではなくコミュニケーションの視点だけでよいのでは。
- ・ 2つの班の連携が図れなかった。また、班会の時間がもてず、班活動ができなかった。
- ・ 研究授業が多過ぎたので、研究授業の仕方を工夫する。